

これからの建築照明

《第3回》「ソフトライト × NTT 西日本研修センタ 本館」
——天井と照明器具を一体にデザインする



コミュニケーションラウンジタ景。天井にはサイズの異なる3種類のソフトライト ラウンドタイプがランダムに配置されている。

本連載ではパナソニックの建築照明器具、SmartArchi（スマートアーキ）を手がかりに、新しい照明とそれによって生み出される新しい空間を探ります。第1回（本誌1404）では天井へ滑らかに繋がる光のグラデーションが特徴の「ソフトライト」を取り上げました。第3回の今回はソフトライトが使われている「NTT西日本研修センタ 本館」（本誌178頁）について、設計を担当したNTTファシリティーズの畠山文聡氏と永石亜紗子氏、照明デザインを担当したシリウス ライティング オフィスの戸恒浩氏にお話を伺いました。（編）

境界を消していく照明

畠山 ここはNTT西日本グループの研修拠点となる施設で、敷地の周囲環境との距離感をどう取るか、研修を行う場として建築がどのようにアプローチできるか、そして人間の感覚的な要素まで取り込んだ、新しい世代の環境建築をいかにつくるかをテーマとしました。

戸恒 照明計画も機能と経済性を重視して省エネを徹底的に図る方針だったので、その条件の中で何ができるかを考えた時に、この建物の建築的な

特徴を手がかりとしました。それは小さな自然（中庭）が分散配置されており、昼に心地よい光を採り入れられるところです。日中、自然光が入るところには照明を付けず、どうしても自然光が届かないところだけに照明を使う。夜は光をコントロールすることでガラスへの映り込みを抑えて視線を遮る境界となることを防ぎ、中庭を通して奥の空間を感じさせる「境界を消していく照明」を追求しました。それによって、内部空間はシンプルなのですが、奥へずっと繋がっていくような広がりがあったと思います。

ランダム配置で活気を表現

戸恒 ソフトライトを使っているコミュニケーションラウンジは、敷地内のメインストリートに面している、建物の顔になる空間です。研修空間のように集中するというより、やや開放的で活気のある場所なので、照明でもそれを表現しようと思いました。

当初計画していた吊り下げ型の照明では少し雰囲気が出ないと思っていたところにソフトライトが登場したので、柔らかな雰囲気がこの空間にちょうどよいと思い採用しました。しかし、ソフトライト ラウンドタイプを規則的に配置しただけではまだ固いと感じたので、器具をランダムに配置し、天井に照明器具を付けるというより天井と照明器具を一体としてデザインしようと考えました。ソフトライトは見方によっては新雪に水を滴らせたようにも見え、月のクレーターのようにも見えます。特徴のあるテクスチャーを持った1枚の天井として、空間を包み込む柔らかな雰囲気がなったと思います。

畠山 1階はグランドレベルより500mm上げていますが、コミュニケーションラウンジだけはグランドレベルと同じにしてあり、外と中が連続しているように感じられます。食事やパーティの時などはにぎやかになりますから、接地性の高い豊かな環境をつくらうと考えました。今までのスマートアーキは



1階エントランスホールから南側を見る。エントランスから伸びた直線の光が来館者の中へ導く。



コミュニケーションライブラリー。NTT西日本の歴史を紹介するスペース。天井には3種類のソフトライト ラウンドタイプ、



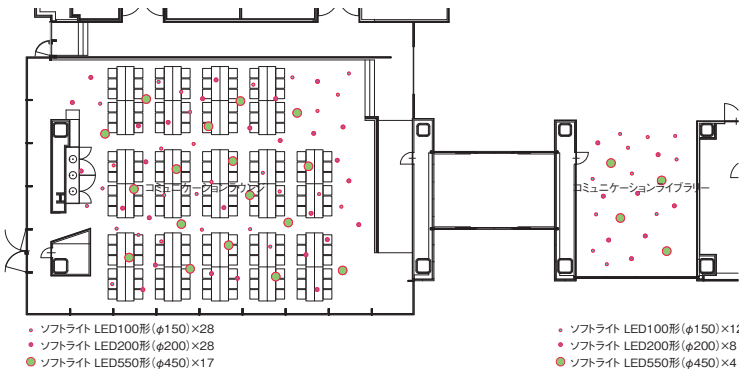
ソフトライト ラウンドタイプ。人が自然に感じるグラデーションの輝度を科学的に評価して反射カーブを設計している。他にラインタイプがある。



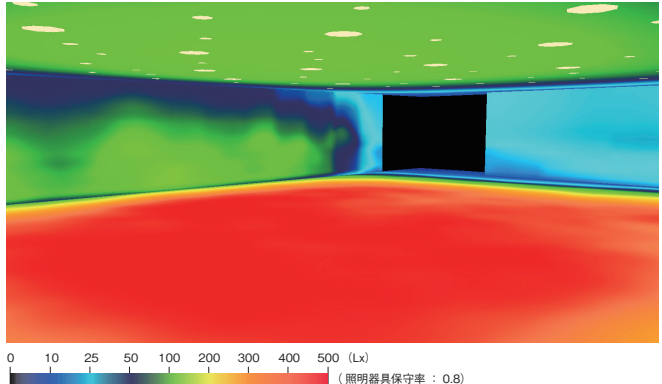
南側からコミュニケーションラウンジを見る。活動が外からも見える。



7階研修階夜景。研修空間内のダウンライトに照らされたカーテンが柔らかく光り、廊下に対して行灯のような役割を果たす。



コミュニケーションラウンジとコミュニケーションライブラリーの配灯図 縮尺 1/800



コミュニケーションラウンジの照度シミュレーション（机上面照度）ランダム配置により、均質な机上面照度を得ている。

面がシャープにデザインされている印象でしたが、ソフトライトは天井と一体になり、溶け込むようにデザインされています。ここでは空間に溶け込ませながらもランダムに配置することで、照明の存在感を消すのではなく、照明を光の粒として表現しています。

合理的に均質な照度が得られる配置

戸恒 コミュニケーションラウンジは多目的スペースという性質もあり、ある程度均質な光環境が必要でした。ランダム配置には照度のムラを消すことができるメリットもあります。今回は3種類のサイズを使いましたが、その配置を工夫することで照度ムラをコントロールしています。また、照明系統を複数に分けていて、1系統消すと、均質性を保ったまま全体の照度を抑えることができます。エリアごとに系統を切り分けるのではなく、全体として擬似的にダウン調光ができるようにしたため、

全体の雰囲気は変えずに段階的に照度をコントロールできます。

永石 建物の北面と東面は敷地外に対して閉ざす一方、南西に位置するコミュニケーションラウンジは敷地中央や他の建物に対して開いていく場所です。ラインタイプの照明だと、照明と平行な方向性が出てしましますが、いろいろなサイズのソフトライトをランダム配置することで、メインストリートを歩く人にこの場所の存在を意識させ、敷地に対する求心性が生まれるようにしました。ソフトライトは取り付け前に現場で製品を見た時は存在感が強く心配でしたが、付けてみると天井に溶け込んでくれたので安心しました。

戸恒 コミュニケーションラウンジが使われている時、外からワイワイしている様子が見えるんですね。その雰囲気が少しでもよくなるように照明で貢献したいと思いました。

畠山 ランダムに配置しながら、空間全体が光を

まとう、きわめて合理的な計画になったと思います。（2014年5月14日、新建築社にて 文責：本誌編集部）



左からNTTファシリティーズの畠山文聡氏、永石亜紗子氏、シリウス ライティング オフィスの戸恒浩氏。

SmartArchiのWebサイトでは、各空間のFeuを使った設計モデルプランなど、照明設計に役立つさまざまなコンテンツを用意している。

<http://www2.panasonic.biz/es/lighting/smartarchi/>

スマートアーキ 検索